

平成 21 年 4 月 8 日現在

研究種目：若手スタートアップ
研究期間：2007 年-2008 年
課題番号：19820033
研究課題名(和文) ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』における
人間身体とテクノロジーの表象
研究課題名(英文) A Study on the Images of Body and Technology in James Joyce's *Ulysses*
研究代表者
坂内 太 (SAKAUCHI, Futoshi)
早稲田大学・文学大学院・講師
研究者番号：60453990

研究成果の概要：

ジェイムズ・ジョイスの長編『ユリシーズ』を研究対象とし、人間身体、及びテクノロジーの表象を精査して、『ユリシーズ』における身体論的研究という新しい研究領域の可能性を示した。特にエピソードごとの傾向、及び登場人物と身体表象との間に見られる相関関係を分析することにより、作品が持つ膨大な人体部位のカタログとしての側面を明らかにすると共に、広範な人間群像に関して豊富な身体表象が積み重ねられる一方、主要な登場人物の身体表象に関しては寡黙が貫かれ、身体的存在の確証が読者に十全に与えられずにいることなど、身体表象を巡る作家の特殊な偏向を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,400,000	0	1,400,000
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,800,000	420,000	3,220,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米/英語圏文学

キーワード：モダニズム文学 身体論 ジェイムズ・ジョイス

1. 研究開始当初の背景

アイルランドに生まれ育った作家ジェイムズ・ジョイスが、1918年から雑誌 *The Little Review* に『ユリシーズ』を連載し始めて以降、この作家の作品が世界文学に与えてきた影響は極めて大きい。この作品は単に文学の枠を超えて欧米のモダニズム文化に大きな影響を及ぼしている。しかしながら『ユリシーズ』において、間テクスト性を巡る研究は豊富になされてきた一方で、作者が重きを置く人間の身体やテクノロジーの表象を精査する研究は、ほとんどなされてこなかった。本研究は、『ユリシーズ』の中に豊富に見られる身体イメージが、如何にこの作品において重要な意義を持つのかを、文学テクスト及び関連する視覚的資料の詳細な分析、同時にまたモダニズム文化における人間身体の表象とその図像学的分析を通して明らかにし、モダニズム文化の身体表象のコンテキストのなかで『ユリシーズ』が占める特異性を明らかにすることを目指した。

筆者は、アイルランド国立大学ダブリン校 (University College Dublin) で、演劇における女性表象をテーマに博士論文の為の研究を重ねてきた。その過程で芸術作品における人間の身体イメージの重要性に着目し、博士論文以後の更なる研究の為には、演劇に隣接するジャンル(小説、映画、美術、マス・メディア等)へリサーチの範囲を広げる必要性を痛感するに至った。また、アイルランドでは、『ユリシーズ』の翻案戯曲の上演を含む)舞台写真家として多くの演劇作品に参加しつつ、身体芸術が記録されてアイルランドのマス・メディアに流布する現場を観察してきた。博士論文執筆に際して演劇テクストの学術的な分析を続けながら、アイルランド文化の諸相における身体イメージの多領域横断的な検証に対する関心を深めてきた。また、アイルランドの作家、劇作家、詩人達へのインタビューを重ね、文学テクストに現れる人間の身体のイメージが、如何に同時代のテクノロジーと身体との緊張関係を反映しながら構築されているかを目の当たりにしてきた。本研究を若手スタートアップという研究種目の中で展開しようとする背景には、こうした研究活動の蓄積があった。

筆者は、以上のようなこれまでの研究を踏まえ、所属研究機関において、文学・演劇テクスト内部の人間身体の表象を中心として、文学に隣接する芸術諸ジャンルを視野に入れつつ多領域横断的な全く新しい身体論研究を立ち上げつつある。本研究は、こうした経緯の所産である。

2. 研究の目的

本研究は、モダニズム文学の代表作品であるジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』において、人間身体の表象が占める特異性を明らかにすることを主たる目的とする。研究の目的は、より具体的には、主に以下の点にあった。

(1) 百科全書的、あるいは包括的な文学カタログ式に、様々な事象のディテールに絶えず言及することで成り立っている『ユリシーズ』のテクストを詳細に分析し、人間身体とテクノロジーにかかわる全ての箇所に着目した上で、そこで言及・引用されている元の視覚的素材(映画、美術、写真芸術、演劇、文化的事象等)を、作品の各章ごとにデータベース化する。

(2) データベース化した視覚的素材を図像学およびカルチュラル・スタディーズの方法論を援用しつつ考察する。

(3) デカルトやド・ラ・メトリ等、人間身体と機械との関係を考察した思想の系譜を20世紀前半までたどり、それらのジョイス作品への影響を可能な限り検証する。

(4) ジェイムズ・ジョイスがなぜ、どのようにして人間身体(及びテクノロジー)の表象を、重要な要素として作品に導入したか、そうした表象の、『ユリシーズ』各章における意味を明らかにする。

(5) ジェイムズ・ジョイスが『ユリシーズ』で実践した身体表象の特異性を明らかにする

ヨーロッパ諸言語に堪能で知識欲の旺盛だったジェイムズ・ジョイスの作品に、20世紀前半の欧米の広範な文化的状況が影響を与えていることは、既に多くの研究者たちによって指摘されてきた。しかしながら、これまで明らかにされてきたのは、文学や哲学・思想など、主に活字文化を中心とした作家と時代との間の影響関

係であった。文字には置き換えにくい人間の身体的な在り方と時代との関わりが、文学表現の極限とも言われる『ユリシーズ』の中で重要な要素となっていることは、ほとんど論じられてこなかった。それは「自分にとって、もはや英語表現において出来ないことは何もない」と自負したと半ば伝説的に伝えられるこの作家が、欧米の活字文化における重要な参照点となってきた経緯のせいでもあるだろう。しかしジェイムズ・ジョイスが、文学のみならず映画や美術など、人間の身体を表象をより直接的に扱う芸術ジャンルにも精通していたことは、例えばジョイスが『ユリシーズ』執筆時に作品に対する批評を画家に求めていたこと、また、すでに1909年には映画文化の重要性に目を向け、アイルランド史上初めての商業的な映画館を設立することに傾注していたことなどからも明らかである。こうしたジョイスの視覚芸術への造詣を念頭において改めてジョイス作品を丹念に検討すると、身体を表象が或る重要な意味を担っていることが分かる。1900年代初頭に構想され、第一次世界大戦後に刊行された『ユリシーズ』の中では、折に触れてテクノロジーの脅威と、大戦という大量殺戮技術の実践に対する反感とが暗示されている。『ユリシーズ』執筆時期にジョイスが友人に書き送った手書きの計画表等から分かるように、この作品のそれぞれの章は構想段階の最初期から「腎臓」「心臓」「生殖器」「肺」「食道」「脳」「子宮」「神経」等の身体器官をキーコンセプトとして与えられており、作品自体が人間身体の調和的な統一の見取り図として構築されてもいる。20世紀前半の映画において、機械と人間身体の緊張関係の表象が一つの重要なモチーフとなっていたことは、ジェイムズ・ジョイスの生前に公開されているフリッツ・ラングの『メトロポリス』やチャールズ・チャップリンの『モダン・タイムズ』などの作品を持ち出すまでもなく明らかであるが、そうした身体とテクノロジーの緊張関係を、同時代にジェイムズ・ジョイスが執筆・公刊した『ユリシーズ』のテキストの中に探求することは、そうした研究がほとんどなされてこなかったという事実を考慮しても、きわめて妥当かつ有意義な研究目的であると言えるだろう。

3. 研究の方法

2007年度は、『ユリシーズ』の執筆に際する作者ジェイムズ・ジョイスの計画書および『ユリシーズ』の詳細なテキスト分析と連動しながら、パーソナル・コンピュータを使用した資料の収集・整理を中心とした。

まず、ジョイスが『ユリシーズ』を構想した時期に残している複数の執筆計画書を、草稿研究のレベルで分析し、執筆計画書のそれぞれに書き込まれている人間の身体イメージの構想を比較検討した。このリサーチに際しては各種のファクシミリ版原稿を底本とした。

次に、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』の中で描写されている登場人物の身体的な有り様とそれに関連する表現を、作品の全てに渡って抽出し、データベース化した。この作業は、『ユリシーズ』における重要な登場人物（レオポルド・ブルームやモリー・ブルーム、およびステイヴン・ディーダラス）の身体イメージに限らず、この作品の全ての章における多種多様な登場人物たちについて実施した。同時にまた、『ユリシーズ』の中で言及・暗示されている、身体を表象に関わる様々な事象・芸術作品その他に着目し、個別具体的な事象・芸術作品等の視覚的なデータを収集・分析した。

当該年度のリサーチに関しては、ペンギンブック版 *Ulysses* の註釈者としてアイルランドの文化的・歴史的コンテキストにおける『ユリシーズ』研究の新たな地平を開き、また、「人間の心身問題解決のテキストとしての『ユリシーズ』」という新たな観点から作品分析を続けている Declan Kiberd 教授 (University College Dublin) と密な連絡を取りながら、ジェイムズ・ジョイス作品に於ける人間身体を表象研究という全く新しい身体論の展開について、専門的なフィードバックを得るよう努めた。

2008年度は、『ユリシーズ』における人間身体を表象を、登場人物ごとに詳しく比較検討することで、これまで等閑視されてきた『ユリシーズ』の身体論的特異性を浮かび上がらせた。これに際しては、本研究の初年度にリサーチした、ジェイムズ・ジョイスによる『ユリシーズ』執筆計画書、とくに人間の身体イメージの構想

に関する記述を比較対照の基礎資料とした。この執筆計画書の分析に関しては、残存する書簡やジョイスの関係者・友人たちによる回想録、あるいはジョイス研究者たちによる伝記的な調査等の資料にあたり、ジェームズ・ジョイス個人の身体観・テクノロジー観の発展を伝記的なレベルで検証し、その個人史の中で『ユリシーズ』における身体イメージの構想がどのように位置づけられるのかを検討する作業も行った。同時にまた、伝記的情報のみならず、『ユリシーズ』の各エピソードで作者が展開した執筆戦略を考察した。

なお、初年度に引き続き、本研究の2年目に際しても、上述のジェームズ・ジョイス研究家 Declan Kiberd 教授と密な連絡を取り、研究の各段階で専門的なフィードバックを得られるように努めた。アイルランドの各図書館（とりわけ、University College Dublin, Trinity College および National Library of Ireland）のジェームズ・ジョイス関連書籍は膨大な分量に及ぶため、これに関しては初年度と同様に閲覧・調査を行った。

4．研究成果

本研究では、ジェームズ・ジョイス研究においてこれまでに存在しなかった身体論的研究の豊かな可能性を示し得たと思われる。身体の表象を巡る全エピソードの傾向、及び登場人物と身体表象との間に見られる相関関係を精査することで、作品が持つ膨大な人体部位カタログの要素を明示することが出来た。同時にまた、人間群像に関しては豊富な身体表象が読者に提示される一方、主人公の身体表象に関しては、ほぼ完全な沈黙が保たれ、主人公の身体的存在の確証が読者には最後まで与えられずにいるという、身体表象を巡るジョイスの特殊な偏向を明らかにし得た。

身体表象をキーワードとして『ユリシーズ』を分析することで、ジェームズ・ジョイスが、一見すると作家としてのアイデンティティを活字文化に唯一的に見いだしていたようであり、実は創作活動の根幹においては、20世紀前半の視覚芸術における人間身体（及び、それと緊張関係を持つテクノロジー）の表象を巡る広い

コンテクストを意識していたことが明らかになった。

文学作品における身体表象の研究が未だ発展途上であることを考慮するならば、本研究は、モダニズム文学研究において多領域横断的な全く新しい身体論研究の地平を切り開く可能性を示すひとつの成果と考えられる。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 坂内太 “A Study on Body Images in James Joyce’s *Ulysses*” (早稲田大学演劇博物館 グローバルCOE『演劇映像学 2008』第4集, 2009年, pp. 115- 143. 査読なし)

6．研究組織

(1)研究代表者

坂内 太 (SAKAUCHI FUTOSHI)
早稲田大学・文学学術院・講師
研究者番号：60453990

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究

なし